

岩大 E_code プロジェクトについて

On the “Gandai E_code” project

岩大 E_code

五味壮平¹・越戸浩貴²・小松美沙紀²・佐藤志穂²・椎名雄資²・
鈴木愛美²・盛内成太一²・菅野郁恵²・田村裕樹²・藤原かおり²・
斉藤生恵²・菅原有美²・曾根明恵²・城守理佳子²・松田唯香²・佐々木裕康¹・
嘉村祐人¹・武田桜¹・小山内慈¹・
及川智輝¹・菊池玲花¹・田代華奈子¹・高梨翔太¹・照井絢子¹

岩手大学¹ 岩手大学卒業生²

概要：本稿では陸前高田を応援することを目指す有志団体「岩大 E_code」のこれまでの活動の概略を紹介し、その意義と課題について検討する。

abstract： In this article, we introduce the activity of the group named “Gandai E_code”, which is a team for encouraging the people and the city of Rikuzentakata. We also discuss the values and problems of those activities.

1. はじめに

2012年1月、オープンが間近にせまっていた陸前高田市の仮設商店街（栃ヶ沢ベース）に入居予定の事業主の方々から、岩手大学の学生たちが店舗再開後の戦略を提案する機会をいただいた。この機会をきっかけとして、2012年4月、岩手大学の教員（五味）と学生数名による岩大 E_code という有志団体が立ち上がった。本稿では、陸前高田を応援する団体として、岩大 E_code が行ってきた活動の概略を紹介し、その活動の意義と課題について検討する。

2. 岩大 E_code の活動の概略

岩大 E_code の活動は、高田市民のさまざまな方々との出会いと対話をもとに、自分たちにできることを手探りでるところから始まった。活動の比較的初期の段階から自分たちにできることは情報発信であると考え、陸前高田に関する情報誌の作成を目指すことになった。また団体そのもののミッションを、「陸前高田市民を中心とし、陸前高田に関心を寄せる人々により構成される拡大コミュニティ¹」の形成・維持・発展の一助になること、陸前高田市の内部と外部のつなぎめの一つとなることとし、情報発信はその手段として位置づけた。

2012年度は、栃ヶ沢ベースのオープニングイベントの企画実施後、情報誌「いいことマップ」Vol. 1～Vol. 4（図1）を発行した。『いいことマップ』、陸前高田を訪問している人たちに訪問中の体験をより深いものにしてもらいたいという思いのもと、E_code メンバーがとらえた陸前高田の魅力を取り上げた冊子である。各号の特集は「栃ヶ沢ベース」（Vol. 1）、「2012、陸前高田、夏。」（Vol. 2）、「みんなが集まる あたたかい場所」（Vol. 3）、「陸前高田未来マップ!!」（Vol. 4）となった。それぞれ6000部～7000部刊行され、市内外・県外広くて配布・頒布された。『いいことマップ』は第一義的には高田市外の人向けに制作されたものであったが、市内の方にも少なからず手に取っていただき、様々なコメントをいただいた。

2013年度に入り、初期メンバーの多くが卒業で大学を去ったことで中心メンバーがほぼ入れ替わった。この年度の初めに、E_code の働きかけによって500人の人に陸前高田にきてもらうことを作業目標として設定した。この頃市内では、仮設商店街の協議会設立を探る動きがあり、「市外から一本松を見に来てくれる人は多いけれど、せっかく営業している仮設商店まで足を運んでくれる人が少ない。」「どこで営業しているかわからないのではないか」「看板の設置や店舗を網羅的に紹介するメディアが必要だ」といった声が聞こえていた。E_code 側でも、これまでとは違ったガイドブックを作成してみたいという議論があった。そこで、E_code から手を挙げる形で、市内店舗を紹介するための情報誌『たかたび』の作成プロジェクトがスタートした。このプロジェクトは、陸前高田未来商店街、高田大隅つどの丘商店街、栃ヶ沢ベース、再生の里ヤルキタウン、陸前高田元気会、そして陸前高田市商工観光課の協力のもとに展開された。作成プロセスにおいて、上記作業目標も鑑み、E_code のメンバーが取材するだけでなく、市外のさまざまな方に呼びかけて高田に足を運んでもらい、取材・撮影・文章作成までをお願いする形にしようということになり、「ガイドブックキャンプ」という企画を夏休み期間に三度実施するなど、取材、文章作成の機会を提供した。最終的に『たかたび』は約100ページのボリュームある冊子となり、2014年2月に1万部発行され、陸前高田市内、岩手県各地、宮城、東京ほか全国各地で配布された（図2）。



図1 『いいことマップ』



図2 『たかたび』・『たかたび+』

2014年度は、前年度刊行できなかった『いいことマップ』Vol.5(特集「高田もの語り」)とVol.6(特集「陸前高田の芸術が、熱い!」)(図1)、そして『たかたび』発刊後にオープンした飲食店や宿泊施設を紹介する小冊子『たかたび+』(図2)の刊行をおこなった。陸前高田という地域や人々への理解と関係性もそれなりに深まってきており、復興グルメF1大会への協力、岩手大学1年生の被災地学修へのアテンド、各地での物産展等のイベントの主催や協力、高田訪問者のガイドなど、より多彩な活動を展開するようになってきた。

2015年度に入り、これまで作成してきた情報誌はそのターゲットがあいまいであったとの反省から、ターゲットをより絞り込んだ冊子を作るべきとの議論がなされた。その結果、岩手県内在住、かつ大学生など若者を主たる読者として想定し、陸前高田に興味をもってもらうことを意図した情報誌『だいぶそこまで』春号(特集「陸前高田xおしゃれ」)を制作・刊行することになった(図3)。またこの年度には、栃ヶ沢ベースの仮設店舗の壁面を活用し震災後の歩みを可視化しようとする掲示物「万歩計」の制作・展示、陸前高田市商工観光課が取り組み始めた外国人に対する環境整備のための「VISIT TAKATAプロジェクト」への協力(市内飲食店・宿泊施設のメニューやサインの英語化)などにも取り組んだ。

2016年度は『だいぶそこまで』春号の続編として、そのコンセプトやターゲットを引き継ぎつつ、サイズなどの改良を施した秋号(特集「山の温泉、海の温泉」)を9月に刊行した(図3)。また、学内にふえてきた地域応援団体にE_codeが呼びかけ、計7団体がコラボするイベント「いわてぬぐだまるフェア」を盛岡市の商業施設クロスステラスにて11月に開催したところである。

5年強の間に、E_codeの活動にはかなりの学生が参加することになったが、正式メンバーとしては過去15名が卒業し、現在も8名が所属している。これ以外に他の大学所属学生も含め、準メンバーとして活動を支えてくれた学生も少なくない。



図3 『だいぶそこまで』

3. 岩大 E_code の活動の意義と課題

震災後5年を経過した時点で振り返った時、E_codeの活動には以下のような意義があったと考えている。

1) 情報誌そのものの価値

まずは制作した情報誌自体にそれなりの意義があったとは言えるだろうと考えている。特に『いいことマップ』

や『たかたび』など初期の制作物については、事前の予想以上に地元の方々手に取っていただき、また興味を持ってもらえたという手ごたえを感じられることが多かった。また、市外の人々からは例えば SNS などコメントをいただけることが多かった。E_code の活動に対する twitter 上のコメントのアーカイブにどのように評価されたかが残っている (https://twitter.com/E_code1/likes)。しかし、こうした評価は、震災後の時間の経過とともに減少傾向にある。一般に、紙メディアの媒体は、どこの誰にどのように読まれたかということが把握しづらい。制作側の目的や意図（たとえば「岩手県の若者に陸前高田に関心をもってもらうこと」）がどの程度達成されたかについては本来検証がもっとしっかり行われるべきである。一方で発行から時間が経ってきたことで、震災後の陸前高田市の状況や大学の活動を記録するアーカイブとしての価値も出始めていると考えられる。

2) 学生たちが継続的に陸前高田に通い続けたということ

岩大 E_code の活動、あるいはそこから派生した活動のもとで、震災後 5 年以上でのべ数百（千？）名規模の学生たちが陸前高田に通い続けることになった。地元の方々に名前と顔を覚えてもらい、かなり親密な関係性を構築した学生も少なくない。高齢化、少子化が進行する被災地に、若者たち（しかも地元の大学生たちが）が継続的に来続けているという状況を作りだせた効果は間接的かもしれないが、それなりにあるだろうと考えている。

3) 卒業生の貢献と関係性の継続

岩大 E_code を引退後、陸前高田をはじめ気仙地方に住み、働いている、あるいは働く予定の卒業生が複数存在する。貴重な若手の働き手として活躍している。これら以外の卒業生のなかにも、卒業後に陸前高田市を訪問し続けているものが少なくない。メンバーそのものが活動を行う中で、陸前高田市への愛着を深め、拡大コミュニティの一員となってきたと言えるだろう。

4) 情報誌の取材活動などを通じた市民と大学との関係性の形成

E_code が取り組んできた情報誌を制作し情報発信を行うというプロセスの実践は、結果的に、多様な市民と知り合い関係性を構築することに直接的につながってきた。この積み重ねの効果は大きく、陸前高田をめぐる状況や市民の感じ方・考え方、さらにはこのまちの文化や歴史などに関する理解も深まった。教員メンバーである五味は、そうした理解を、盛岡周辺での陸前高田ゆかりの人たちのコミュニティづくり、まち・ひと・しごと総合戦略策定のための会議、復興祈念公園の協働体制構築に関するワーキンググループ、岩手大学と立教大学との協働で検討を進めている陸前高田グローバルキャンパスなどの場で活かす努力をしているところである。

5) 拡大コミュニティ形成というミッションに照らして

団体のミッションである「拡大コミュニティの形成・維持・発展」への貢献については、市内の人々との結びつきはともかく、市外の人たちとの関係性をもっと構築できればよかったと考えている。また、市外の人たち同士のネットワーク化・コミュニティ化への働きかけも弱かった。しかし 20 代～30 代の若者、とくに陸前高田出身、岩手出身の若者たちとメンバー学生たちはそれなりのネットワークを形成した。将来的に、こうしたつながりがいきる場面が出てくる可能性はあると考えている。

6) 学生たちの学び

E_code の活動に対して、当初、五味の研究室のゼミ生として演習や卒業研究として取り組んできたメンバーもいたが、参加できるメンバーに制約が生じる、あるいは単位になる学生とならない学生が混在する、というのはよくないという判断から、原則として課外活動として位置付けられるようにした。課外活動としては、相当なエネルギーと時間が必要なものとなり、学生によっては本業とのバランスを取るのが難しい時期を経験したのもいたかもしれない。しかし、それでもなお、これは、あくまで大学側の立場からみたメリットということであるが、陸前高田に通い続けるという経験を通して学生たちが得た学びは限りなく貴重なものであったと考えている。

4. おわりに

以上、岩大 E_code の取組について振り返ってきた。あくまで途中経過としての報告である。

本稿では、拡大コミュニティという概念とその具体的な形、そして形成・運営方法については触れることができなかった。別の機会にゆずることにした。

また岩大 E_code の活動を展開するプロセスにおいては、その活動の意義について常にふりかえり、自問し続けることになった。E_code が行ってきたような情報発信は、復興プロセスのなかで不可欠とは言えないのではないかと、いう半ば脅迫的な意識が常に存在していたからだと思われる。岩大 E_code の活動に限らず、災害後に行われる様々な取り組みで、あらゆる立場や観点から「不可欠」あるいは「絶対的に正しい」と言える活動は比較的少ないといえるのではないかと。特に「大学として、あるいは学生たちは被災地とどのように関わるべきか／関わるのか」という問いは、災害後に大学関係者が抱えるきわめて一般的な問いであると言えるだろうと考えている。もちろん、ボランティア活動というのはその一つの在り方であるが、いわゆるボランティア活動にも課題は少なくないであろう。ちなみに岩大 E_code の学生たちには、ボランティアや支援に携わっているという意識はほとんどない。

「大学として、あるいは学生たちは被災地とどのように関わるべきか／関わるのか」という問いについて、我々なりの答えを出すことは、東日本大震災の被災地にある大学に在籍し、震災後の活動に携わったものとしての一つの責務だと考えている。この問題についても別の機会に論ずることとする。

謝辞

岩大 E_code の活動は、陸前高田市民の皆さまをはじめ、陸前高田にゆかりのある多くの方々に支えられてきました。また岩手大学内部においては、一連の活動は「三陸復興推進機構」(2016年より「三陸復興・地域創生推進機構」)のサポートのもとで行われ、「三陸沿岸地域の「なりわい」の再生・復興事業」(文部科学省)、「気仙地区(学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生事業)」(岩手県)、「教育研究改善プロジェクト」経費(岩手大学人文社会科学部)、そして音楽グループ「スターダスト☆レビュー」とそのファンのみなさまから提供いただいた寄付などによって支えられてきました。この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

注

1 ちなみに、活動開始直後は、拡大コミュニティではなく独自に「広域コミュニティ」という言葉を使用していたが、廣田部門長が「拡大コミュニティ」という概念を提唱されていることがわかり、同じ大学で類似概念に違う名称を付けるべきではないと考え、「拡大コミュニティ」にあわせることとした経緯がある。

著者紹介

五味壮平：岩手大学教授。人文社会科学部・三陸復興・地域創生研究センター・地域防災研究センター。専門は情報学。2012年より陸前高田にて岩大 E_code プロジェクトを開始。2014年から高田松原津波復興祈念公園 協働デザインワーキンググループ、2015年から「陸前高田市まち・ひと・しごと総合戦略策定会議委員」に従事。

住所：〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-34, E-mail: gom@water-u.ac.jp



岩大 E_code メンバー：

越戸浩貴・小松美沙紀・佐藤志穂・権名雄資・鈴木愛美・盛内成太一・菅野郁恵・田村裕樹・藤原かおり・斉藤生恵・菅原有美・曾根明恵・城守理佳子・松田唯香・佐々木裕康・嘉村祐人・武田桜
小山内慈・及川智輝・菊池玲花・田代華奈子・高梨翔太・照井絢子

